

科目名	弦楽奏法研究Ⅰ～Ⅷ	形態	実技	開講期	春・秋
担当教員	実技担当教員	単位	3	年次	1, 2, 3, 4

＝授業科目の目標＝

楽器演奏における基礎的な技術を習得し、社会に貢献できる演奏家・教育者になることを目指して、幅広いジャンルの音楽表現に精通する。

＝履修の条件と学習の方法＝

教員と相談の上、適切な課題曲・試験曲を選び、レッスンに向けて予習すること。
 可能な限り自ら練習方法を工夫し、段階的に訓練の成果をレッスン時に発表する。
 レッソンのあとは注意点を反芻し、改善すべき事項を把握した上で、さらなる練習を積み重ねる。
 頭脳を使った効果的な修練をこころがけ、無駄のない時間感覚を身につける。
 いかなる楽曲に対しても敬意をはらい、作曲者が意図した技術的・内面的な音楽の細部を丁寧に表現すること。

＝授業内容＝

(1年次)

- 1期 姿勢・かまえなども重要なポイント。弾く準備にとまなう呼吸にも注意をはらい、音を出す瞬間の前後の集中力が、無意識の中でも高められるように日々訓練する。
- 2期 姿勢・かまえなども重要なポイント。弾く準備にとまなう呼吸にも注意をはらい、音を出す瞬間の前後の集中力が、無意識の中でも高められるように日々訓練する。

(2年次)

- 3期 楽曲の理解においては、(伴奏者・共演者が存在する場合)他者にアンサンブルやバランスの指示ができるレベルを基準とし、ただ単に音を羅列するのではなく、共に演奏する者や聴く者にその楽曲がどのように伝わるかを想像しながら練習を重ねる。
- 4期 楽曲の理解においては、(伴奏者・共演者が存在する場合)他者にアンサンブルやバランスの指示ができるレベルを基準とし、ただ単に音を羅列するのではなく、共に演奏する者や聴く者にその楽曲がどのように伝わるかを想像しながら練習を重ねる。

(3年次)

- 5期 全体像の中には、演奏会場に対する意識や、聴く者への配慮を含め常にテンポ・音量・音色が最適な状態にあるかどうかを吟味しながら取り組む。レッスンにて与えられる諸注意を一元的にとらえるのではなく、自分の知識や経験をそこに織りませながら、時には他者のアドバイスを参考にしながら練習の方向を定めていく。
- 6期 全体像の中には、演奏会場に対する意識や、聴く者への配慮を含め常にテンポ・音量・音色が最適な状態にあるかどうかを吟味しながら取り組む。レッスンにて与えられる諸注意を一元的にとらえるのではなく、自分の知識や経験をそこに織りませながら、時には他者のアドバイスを参考にしながら練習の方向を定めていく。

(4年次)

- 7期 演奏という芸術分野に完全な完成というものには存在しない。常に、一音一音に心血を注ぎ、たとえ自分では非の打ち所のない演奏と思えども、さらなるクオリティーの向上をこころがけること。
 技術的に習得できたと自覚している部分も、本当にそれが高い音楽性に裏付けられているものかどうかを、たえず自ら疑い、客観性をもって自分の演奏を判断する努力をおこたらないこと。
 楽曲を習得した、との自信がついてからも、メトロノームやチューナーで細部をチェックしながら練習すること。

8期 演奏という芸術分野に完全な完成というものは存在しない。常に、一音一音に心血を注ぎ、たとえ自分では非の打ち所のない演奏と思えども、さらなるクオリティーの向上をこころがけること。
技術的に習得できたと自覚している部分も、本当にそれが高い音楽性に裏付けられているものかどうかを、たえず自ら疑い、客観性をもって自分の演奏を判断する努力をおこたらないこと。
楽曲を習得した、との自信がついてからも、メトロノームやチューナーで細部をチェックしながら練習すること。

＝成績評価の方法と評価の基準＝

実技試験をもって成績を評価するが、出席や楽曲の理解度も評価の対象とする。

点数はある程度採点者の絶対的な判断によるものではあるが、受験者の段階的な進歩や後退や、同時に試験を受けた者との相対的な比較評価も含まれる。

＝その他＝

特になし